お腹が空いたのでお金を稼ぎたいのです。剣術極めた死神の無自覚ライフ　～R18版～

狂骨

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ユーハバッハとの決戦が終わり一段落　落ち着いた尸魂界。

最強の力を持ちながらも自覚する事なく、誰も知らない場所で平和をもたらした死神はまたいつもの日常へと戻るが、事態が収束した事によって彼に好意を抱いた女性死神達の欲望が暴走し、彼を囲い襲うのだった。

先に本編の閲覧をお勧めします。

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２８７１８７／

目次

ネムの恐ろしい性欲 ―― 1
卯ノ花隊長は怖い ―― 16
勇音と卯ノ花は師弟 ―― 31
初代八番隊隊長の愛は重い ―― 47
三つ編みと眼鏡に挟まれる ―― 72

ネムの恐ろしい性欲

『護廷十三隊』

それは１０００年前に尸魂界を統制するために山本重國元柳斎が立ち上げた自警団だ。

そんな中、今代の最も不気味な死神である涅マユリが率いる第十二番隊には、とある死神が隊員として在籍していた。

その者の容姿はまだ幼く最年少で隊長格へと登り詰めた日番谷冬獅郎と同じ程であるにも関わらず、彼の持つ斬魄刀は目の前にあるものを全て切り伏せ、それを易々とこなす肉体から放たれる拳はどんな能力さえも打ち破り一撃の元に沈めてしまう。

そんな最強の力を持った死神の名は『園原千弘』

彼は今までどんな相手がこようとも負けたことはない。そして、幾度となく尸魂界を支配しようとした敵を傷を負うことも無く倒していった。護廷隊を裏切った藍染、そして世界を我が物にするべく霊王を吸収したユーハバッハ。

全てを打ち沈め、無自覚ながらも平和を取り戻した少年は再び平穏な日常を謳歌す

る。

そんな彼に惹かれた女性達は大仕事が去ったために今まで伏せていた〝欲望〟を暴走させるのであった。

ーーーーーーーーー

ーーーーー

ー

ユーハバッハとの決戦より数ヶ月。季節は夏となり、暑さが目立つものの瀞霊廷の復興は着々と進んでおり、昼は工事の音で鳴り響いていたが、夜は一変し静かであった。

そんなある夏の日の夜。美しい月が瀞霊廷を照らす中であった。

「ふ～。夜は涼しくていいな～」

千弘は自室の回廊で腰を下ろし脚をフラフラさせながら目の前に浮かぶ月を眺めていた。

目の前を浮かぶ月は崩壊した瀞霊廷を美しく照らしており、見ているだけで何故だか気分を落ち着かせてくれる。

そんな時であった。

「お疲れ様です。千弘さん」

横から声がし、その声を耳にした千弘はパァと顔を輝かせると振り向いた。

「お疲れ様です眠さん！」

そこに立っていたのは長い髪を後ろに纏めて三つ編みにしている女性死神であるネムだった。彼女は隊長であるマユリの秘造魂魄実験より生み出された人造死神であり、彼の娘でもある。千弘が入隊してから彼と交流を重ね、少し前に晴れて夫婦となったのだ。

そんな彼女は千弘の笑った顔を見ると微笑みながら彼の隣に腰を掛ける。

「今日はどうでしたか？」

「いえ、普通でしたよ。朝起きて技術開発局を掃除してお茶汲みをして、それから霊王宮に行って農業して、それから戻ってと。まぁ変わったことといえば藍染隊長のところに暇つぶしにいって中指を立てられた事ですね～。とりあえず改良版タバスコをぶち込んであげましたよ。あとは～」

それから2人は今日の出来事をお互いに話し合った。

「……ふふ」

千弘の話を聞いていたネムは口元に手を当てながら笑みを溢す。以前の彼女は感情の起伏が乏しく、あまり笑い声を浮かべるどころか、笑みを浮かべる事さえも少なかっ

たが、千弘と交流していくうちに自身で成長を遂げ、いつしか普通の女性の様に笑う様になった。
そんな彼女は、豊かな感情と共にある〝欲望〟も人間と同様に湧く様になった。
すると
「千弘さん…」
「はい？なんで…むぐぅ!?」
ネムは彼の身体へとゆっくりと手を回し、その身体を自身の胸元に抱き寄せた。
「ね…眠さん…何を!?」
「…ふふ。千弘さんの反応は相変わらず可愛いですね…」
胸元におさまった千弘は彼女の豊満な胸の谷間を掻き分けながら顔を出し見上げると、そこには頬を染めながら笑みを浮かべる彼女の顔があった。
「…く…苦しいです…」
「そう言いつつも…興奮してらっしゃる様ですね？」
「ひぐ!?」
すると　ネムの手が胸元に埋まる千弘の下半身へと伸びて〝1箇所〟を優しく撫でる。

以前までは物静かであった彼女。マユリ以外では笑いもしない上に人間が持つ欲求さえも積極的に見せなかったが、彼と結ばれてからは――――

――――過剰な性的欲求を持つようになった。

「私の可愛い千弘さん…今夜もたくさん……可愛がってあげますからね…」

「うう…」

艶やかな声で囁いた彼女は自身の胸元に埋まる千弘の頭を撫でて部屋の中へと入っていった。

ーーーーーーーーー

ーーーーー

ーーー

ー

「〜!!」

「ふふ…どうしました?まだ始めたばかりですよ」

誰もいない部屋の中でネムは自身の膝下に千弘の顔を乗せながら自身の巨大な乳房を押し付けていた。彼女の乳房は一般の女性隊員とは比べものにならないほど豊満で

あり、片方でも千弘の顔がそのまま埋まってしまう程であった。
　そんな彼女の乳房を押し付けられていた千弘はまるで赤ん坊のように先端の柔らかな乳首を吸っており、その様子を微笑みながら見ていたネムは彼の勃った小さな突起物を優しく撫でていた。
「もっと遠慮なく吸ってもいいんですよ？」
「むぐぅ!?」
　その言葉と共にネムの押し付ける力が更に強まり千弘の顔が完全に乳房に覆われてしまった。それと共に彼女の手の先にある千弘の股間は更に力強く勃ち上がった。
「ふがぁ…ね…ねむ…りさ…ん…くる…ひぐ!?」
　胸元から千弘の声が聞こえてくるとネムは更に股間を擦る速度を上げた。すると千弘の身体の奥底から何が溢れ出そうな衝動が湧き上がってくる。
「〜!!だ…だめ…!!!」
「ふふ…遠慮しないでください。思う存分…出してくださいね」
「〜!」
　――――――!!!!!
　その一言を耳にした瞬間にもう耐える事が出来ず、千弘は射精してしまった。ネムの手に握られていた股間の先端部分から白い液体が次々と飛び出して彼女の手を染めて

いく。
「…ふふ」
それを見たネムは胸元で息を吐く千弘を見ると下半身を押さえながら彼の身体へと跨った。
「千弘さん……私も何故だか熱くなってきたので…交わってください…」
「な!?ま…まっ…むぐぅ!?」
「返事は聞きません」
その言葉と共にネムはいち早く千弘の股間を自身の秘部へと挿入すると同時に千弘を胸元に抱きしめた。
「〜!!!」
股間から感じるネムの体内の柔らかな感触。それが刺激を与え、更に柔らかな胸と胸の間から香る女性特有の甘い匂いが脳を刺激して更に意識を低下させていった。
「ん…♡千弘さんが私の中に…!!凄く気分が高まってしまい…もう制御できません…!!」
興奮が最高潮に達したネムは更に腰を激しく揺らした。それによって彼女の中に飲み込まれた千弘の身体は悲鳴をあげると共に再び衝動に駆られてしまう。

「ね…眠さん…!!これ以上は…!!」

その瞬間

――――――千弘は抑えきれず再びネムの〝中〟に射精してしまった。

「まだ……続けますよ…?」

「ええ!?」

ーーーーーー

ーーーー

ーー

あれからどれほど時間が経ったのかはわからない。だが、分からなくなる程までネムとまぐわった。それによって全身が凄まじい倦怠感に襲われており、立ち上がることすらもできなかった。

愛し合った2人は汗によって湿った布団の上で息を吐きながら横たわっていた。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

「…ふふ。千弘さん…気持ち良かったですよ…」

「むぐぅ!?」

千弘が弱々しく息を吐いている姿を横から見ていたネムは手を伸ばし千弘の顔を挟み込むと再び胸元に抱き寄せた。彼の顔が胸の谷間に埋もれ、身体もまるで飲み込まれるかの様に懐に収まってしまった。

「〜!!」

「よしよし…必死に顔を出そうとしている仕草…本当に可愛いですよ」

胸元に収まりながらも必死に呼吸をしようと顔を動かす千弘を抱き締めていたネムは頬を紅潮させ、子供をあやすかの様にその頭を撫でた。

すると

「…ん?」

ネムの太ももに何かが当たった。見れば先程射精したばかりであるというのに千弘の股間が勃ち上がっていた。

「……ふふ」

それを見たネムは再び笑みを浮かべると、抱き締めていた手を離し、状態を起こすと、横になっている千弘の足を掴んだ。

「な…なにを…!?」

「すぐにわかりますよ…」
突然と脚を掴まれた事に驚くが、ネムは答える様子は見せず、彼の下半身を自身の膝の上に乗せた。それによって彼の股間がネムの豊満な胸元に抱き寄せられる。
「ふふ…　あれだけしたというのに…まだ、お元気そうですね」
そう言うとネムは豊満な胸の前まで寄せられた千弘の股間を撫でると、自身の胸の谷間へと寄せた。
「え!?ち…ちょっ…!!」
何をされるか予感したのか、千弘はネムを止めようとするも、千弘の喘いだ顔や顔を真っ赤にさせながら困惑した表情を目にしたネムはもう自制する気が全くなかった。
「千弘さんが……気持ちよくしてくれたので…今度は私が貴方を気持ちよくしてあげますからね…嫌と言うほど…」
「ま…まって!!これ以上は…うぁ!?」
ネムは千弘の小さな股間を自身の豊満な胸で挟み込んだ。胸の谷間に挟まれた千弘の股間は根本から先端までが全て飲み込まれて見えなくなってしまった。
四方八方から感じる柔らかな彼女の乳房の感触に千弘は身体を震え上がらせると共に先程射精したばかりの股間が胸の中で乳肉を掻き分けながらそそり立っていく。

「ひぐぃ!?ね…眠さん…!!そんなに強く挟まないで…ひぎぃ!?」
「何がですか?」
　周囲から感じる乳肉の柔らかさに千弘は口元から涎を垂らしながら声をあげるが、ネムはそれを見ると更に挟む力を強める。
「千弘さん……中で苦しんでますね…必死に外へ出ようとするのが伝わってきますが…絶対に逃しませんよ…」
　その声を聞いたネムは瞳を細め笑みを浮かべると、上下に揺らし始める。彼女の挟み込んだ乳房が上下左右にこね回されていくと、彼女の乳内に閉じ込められた彼の股間をモミクチャにしていく。
「うぁ!?あ…!!あ…!!」
「どうですか?気持ちいいですか?」
　ネムが訪ねてくるが答えられる余裕や体力がない。答えようとしても彼女の股間を挟み込む胸の圧力によって感じられる柔らかい感触や与えられる刺激によって喋ることすら出来なくなってしまう。
　すると　先程射精したにも関わらず、今までよりも大きな衝動が身体の奥底から湧き上がってきた。
「だ…だめ…これ以上は…ま…また出…りゅ…!」

「出そうですか…? いいですよ…!! たくさん出してください…!! 私の胸の中に…!!!」
「〜!!」

その一言にもう耐える事ができなかった。

「…!!!!!!」

その瞬間　密閉された彼女の乳内に射精してしまった。今までよりも勢いが強かったためなのか、彼女の乳内からは射精した音と共に完全に密閉された谷間から微小な白い液体が流れ出ていた。

「あ…あ…あ…」

先程よりも射精した事によって、千弘は焦点の合わない瞳を開けたまま、ゆっくりと倒れる。

その様子を見たネムは挟む力を弱めず、絞り出すかの様にゆっくりと抜いた。

密閉された胸の谷間からようやく解放された股間は弱々しく倒れており、それを包み込んだネムの豊満な胸の谷間には精液がへばりついていた。

「ふふ…千弘さんは本当に胸が好きなんですね…」
胸の谷間についた精液を見つめながらネムは横たわった千弘へと目を向けた。
いつもは明朗快活である姿は今や死体と見ても相違無いほどまでグッタリと倒れており、目を回していた。
だが

その様子を見てもネムはまだ終わらせる気など無かった。

「まだですよ…」
「ひぐ⁉」
ネムの一度緩んだ手に再び力が入り、彼の射精して力尽きた股間が胸の谷間に飲み込まれた。それによって先程の股間を押し潰すかのように包み込む柔らかい感触が伝わってくる。
「や…やめて…!!眠さんもう無理で……!!」
その感触を感じた千弘は涙を浮かべながら懇願するものの、それがさらにネムの勢いを掻き立ててしまった。

「嫌です…貴方がそんなに可愛い顔を浮かべるのであれば……気絶するまで搾り続けます…!!」
「〜!!!!」
その後　ネムの乳交は何度も何度も射精しても終わる事はなく、６回目でようやく終わったものの、千弘の意識は既に飛んでいた。
ーーーーーーーー
「千弘さん…どうでしたか…?」
「…」
ネムは自身の胸元に顔を埋める千弘に目を向けるが、彼の目からは輝きが失われており、まるで何かに取り憑かれたかのように乳房を咥えていた。
その様子にネムは笑みを浮かべると、彼の顔をもっと胸の奥深くまで抱き寄せて額に口付けをした。
「また挟んで欲しいのでしたら…いつでも挟んで差し上げますからね…私の千弘さん…」
そう言いネムはゆっくりと目を閉じたのであった。
そんな中　その様子を襖の間から覗いていた影があり、その影はゆっくりと光り輝く

眼鏡を掛け直すのであった。

卯ノ花隊長は怖い

とある暑い夏の日。

「お～い。誰かいないか～い？」

四番隊の回廊を京楽が歩いていた。彼は復興作業中に突如として発生した事故から隊員を守った事によって負傷してしまったのだ。

だが、四番隊は総動員で各地に診療所を出張させているために僅かな人数しか残っていない。広い屋敷の中を京楽は声を掛けながら歩き回っていた。

ガラガラガラガラ……

「失礼しますよ～……って……え？」

扉を開けて中を見た途端　京楽は固まってしまった。

右の壁には剣を握る千弘　左の壁には頬を染める千弘　目の前の壁には木刀で素振りをする千弘　そして天井には上半身の衣服を脱ぎ筋トレしている千弘

「なに…こ…れ…」

どこを見ても千弘。上を見ても下を見ても。どこを見ても千弘の写真で埋め尽くされており、その得体の知れない謎の空間を目にすると京楽の心の中が恐怖で染まっていく。

その時であった。

バタン!!

「ひぃ!?」

突然と扉が勢いよく開けられる音が響き渡り、それと同時に背後から身体を刀でなぞるかの様な鋭い霊圧が感じられた。

――――――見ましたね…?

――――――私とあの人の愛の部屋を…

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!!!」

その後　京楽は八番隊隊舎の前で倒れている姿で発見されたそうな。

ーーーーーーーーー

ーーーーーー

ーーーー

ーー

ある夏の暑い日の夜。霊王護神大戦による影響で倒壊した瀞霊廷の復興作業は今も続いており、千弘も十二番隊にとって重要な地点の復興へと駆り出されていた。

「ふぅ…おしまいと」

そう言い千弘は作業を終えたのか、目の前の元の形に立て直された建物を見ながら汗を拭き取ると一息つく。千弘に掛かれば建物一棟どころか区の一つ程度ならば数時間で修復する事など造作もないだろう。

すると
「あらあら、相変わらずご精が出ますね」
いつもの様に優しい笑みを浮かべながら卯ノ花が歩いてきた。たまたま見回りに来たのか、千弘が頭を下げると、卯ノ花は手を横に振る形で気にせぬ様に伝えた。
「それよりも千弘さん。随分と汚れましたね?」
「え?ま…まぁ…」
卯ノ花に言われた千弘は自身の死覇装を見る。その死覇装には所々　泥や木の粉がこびりついており、遠くから見ても分かるほどまで汚れていた。
すると、それを見た卯ノ花は手を叩きながらパァと顔を輝かせた。
「丁度良いので、お風呂に入りましょうか!」
「え…!?い…いや私は…ひょえ!?」
それを耳にした瞬間に千弘は顔を背けるが、それを逃さないかのように卯ノ花の手が両肩に置かれ、顔が横にまで近づけてきた。
「汚れてはこの後の仕事に差し支えますよ…?それにネムさんも汚れていては気分を悪くなされる筈です」
「う…うぅ…」

耳元で囁かれた千弘はネムの顔を思い浮かべると、観念したかのようにゆっくりと頷いた。
「…わ…分かりました」
ーーーーーーーー
ーーーーー
ーーー
ー
四番隊隊舎に設けられた一つの特別な風呂場。そこは卯ノ花が自身1人扱う為に設置させたものであり、彼女以外が入ることは許されていない。だが、最近は勇音のみが入る事を許されており、2人の風呂場となっている。

そんな風呂場の中では、1人の椅子に座った千弘の背中を卯ノ花が背後から洗う光景が広がっていた。
「どうですか?千弘さん」
背後から卯ノ花の身体を擦る力加減について尋ねられると千弘は口を震わせながらも正直な感想を述べる。
「ちょ…ちょうどいいです…」

「それはよかったですね」
そう言うと、卯ノ花の背中を擦る手が止まり、先程の感触がなくなった。恐らくお湯で背中を流すのだろう。
彼女の背中を洗い流す力加減は自身にとっては本当に気持ちの良いものであり、緊張していなければ、蕩けてしまいそうな程である。そんな彼女がそれを刺激するかの様なお湯を流すのを待っていた。

すると

ムニュ
「…え？」
何やら柔らかい感触が背中に広がった。
「何かフニョ……って…!?」
感じられた感触の正体を改めて察した途端に千弘は顔を真っ赤に染め上がらせると、すぐさま立ち上がろうとした。
だが、
「どうかしましたか？」

「ひやぁ!?」
　それを逃さないかの様に卯ノ花の手が首に回り自身にまとわりつくとともに更に胸の感触が広がった。
「まだ洗っている途中ですよ」
「はひぃ!? い…いやその…!!」
「何ですか? 何かあったら……遠慮なく言ってくださいね?」
「ひゃい!?」
　その言葉が耳元で囁かれると共に首に巻きついていた手がゆっくりと頬に触れ、そこから更に線を描くかの様に下半身まで伝っていった。

　そして　その手は遂に自身の股間へと伸び、先端部分から根元までをゆっくりと撫で始める。
「ひぐ!?」
「あらあら…どうしました? こんなに〝硬く〟して?」
「い…いや…!! その…!!」
「うふふ…意地悪な質問をしてしまいましたね。答えなくとも結構ですよ。男性の方々の生理現象ぐらい理解しています」

卯ノ花が囁きながら尋ねてくるたびに耳元の奥底まで彼女の吐息が伝うと共に背中に押しつけられる胸の感触が強くなり、下半身が刺激されていく。更に〝下半身〟を撫でる手の動きもより複雑になり何度も何度も抑え込もうとしても身体が反射的に反応して勃ち上がってしまう。

それを見た卯ノ花は目を半開きにさせながら再び囁いた。

「＿＿＿＿＿溜まってらっしゃるようでしたら…私が晴らして差し上げましょうか…？」

「〜!!!」

妖艶なその囁きと吐息そして再び強まった胸の感触に耐えきれず、股間は更に脈打っていった。

だが、千弘は思い出す。自身には愛する人がいる事を。

「卯ノ花隊長……も…申し訳ないのですが…」

自身には将来を誓った相手がいる。ここでもう1人の女性と関係を持つ訳にはいかない。今の世の中では複数の女性と関係を持つ人は何人もいるものの、千弘は性的関係は人生を共にする1人のみと、決めていた。故に卯ノ花の厚意について謝罪しながらも

自身には既に交わい、将来を誓った相手がいる事を話し拒否の意を示そうとした。
だが、そんなものを彼女が許す筈もなかった。
「わ…私は…!!むぐぅ!?」
その瞬間　顔面が柔らかな感触に包まれると共に息も言葉を発することもできなくなってしまった。
「んぐ…う…うのは…な隊長…!離…し…」
「お断りします（うふふ…私を超える斬術を持つ者が胸を押し付けられただけで骨抜きとは…不思議で仕方がありませんが…まぁいいでしょう）」
胸に埋もれた千弘は何度も何度も胸元を掻き分け、ようやく顔を出すと、顔面を蒼白させた。
「ひぃ…!?」
そこにあったのは、母性溢れる卯ノ花烈としての優しい笑みではなく、目の前にあるもの全てを斬り捨てる卯ノ花八千流としての狂気の笑みであった。
「私が…発散させてあげます」
ーーーーーーーーーーー
ーーーーー

ーー

「う…卯ノ花隊長…やめて…やめてくだ…」

「あらあら。そう言っている割には〝身体は正直〟ではありませんか？」

あれから千弘は彼女の柔らかい身体によって抵抗する力を奪われてしまい、今は彼女になすがままにされる玩具となってしまった。

「ほらほら千弘さん…頑張ってください…まだ始まったばかりですよ？」

「うぁ!?ひぎぃ!?」

卯ノ花は自身の秘部へと挿入した千弘の股間を刺激するかの様に何度も何度も上下に揺れた。それによって彼女の内部に閉じ込められた彼の股間が脈動しながら彼女の秘部の奥へと進んでいった。

そんな中であった。

「ふふ…ただ揺れているだけでは物足りませんよね？」

「え…!?ぶぐぅ!?」

卯ノ花は揺れながら千弘の上半身を抱き起こすと無理やり彼の唇へと自身の唇を押し付け、彼の口内に舌を押し込んだ。

「〜!?ふが…ひゃひをぉ!?」

「…ん♡」

卯ノ花の押し込まれた舌が千弘の口内に侵入すると、逃げ惑うかの様に後退する彼の舌を蛇の如く絡め取った。それによって秘部に挿入された千弘の股間も更に脈打っていく。

「んん…!!ん…!!」

先端から感じられてくる彼女の柔らかな感触とその感触による快楽。それが更に性欲を掻き立てていき、挿入された股間が彼女の中で更に勃ち上がっていく。

だが、それによって千弘自身の罪悪感がさらに膨れ上がっていった。

「(嫌だ…!!嫌だこんなの!!私には眠さんがいるのに…!!)」

千弘は必死に頭の中に自身の想い人であるネムの顔を思い浮かべるものの、下半身が収まることはなかった。

何度も何度も主張しても止まらない恐怖。他の女性と性行為をした自身への罪悪感。

それによって遂に千弘の目からは涙が溢れ出ていた。

「(嫌だ…もう嫌だよぉ…!!)」

だが、その表情は卯ノ花を更に刺激させる引き金となってしまった。

「(あぁ…!!その顔…!!その顔が見たかったのですよ…!!)」

その顔を目にした卯ノ花の表情は歓喜に満ちていた。まるで今までの自身の目標を達成したかの様に。

「(ようやく見つける事ができました…貴方を追い詰める方法を…!!)」

彼女が長年探していた物。それは己から剣を振るう楽しみを奪った千弘を倒す方法であった。

更木との戦いの際につけられた傷さえも潰えてしまう程の千弘との戦い。だが、彼には更木程の残忍さは無く、命を掛ける戦いは叶わず自身が永遠に彼に一蹴されるものとなった。

剣でも殴り合いでも彼には敵わない。だが、一つだけ敵うものがようやく見つかった。それは女として彼に攻め寄せる事である。

己の彼への興味と好意をフルに活用していった事で遂にそれは彼に対して有効である事が証明されたのだ。

それを奥深く感じ取った卯ノ花は頬を染め上がらせると、満面の笑みを浮かべながら上下に揺れ出した。

「千弘さん千弘さん千弘さん千弘さん千弘さん…!!」

「うぁ…!! いやぁ…!!!」

何度も何度も揺れる中、千弘の泣き声が聞こえてくるが、それすらも彼女は己の動力源として取り込んでしまう。

「ふふ…限界ですか?」

覆い被さるかのように千弘に抱きつきながら揺れていた卯ノ花は涙を流す千弘の耳元に顔を近づけると艶やかな声で囁いた。

「いいのですよ…我慢しないでください…私が全て受け止めますから」

その言葉と彼女の柔らかな身体そして己の身体の奥底から湧き上がる衝動に千弘は逆らう事ができなくなってしまった。

「〜!!（眠さん…ごめんなさい…!!）」

その瞬間

千弘は快楽に耐える事ができず、懺悔しながら射精してしまった。

ーーーーーーーー

ーーーーー

ーーー

ー

それから一方的に卯の花から犯された千弘は射精したことによって全身を倦怠感に襲われており、彼女の膝の上で息をついていた。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

千弘の口元からは力が抜けたかの様に唾液と舌が垂れており、その顔を見た卯ノ花は笑みを浮かべる。

「……ふふ。いい顔になりましたね…ほら…貴方の大好きな乳房ですよ?」

そう言うと卯ノ花はネムと同じ大きさと言ってもいい程の巨大な乳房を千弘の顔の上へと乗せた。すると千弘はまるで赤ん坊の様に差し出された乳房の乳首を加え母乳を飲むかの様に吸い始める。

その目にはいつもの様な輝かしい光が失われており、まるで何もかも捨て去ったかの様であった。

その時であった。

「卯ノ花隊長…遅くなってすいません……って!?な…何をやってるんですかぁ／／／／／／」

浴室の扉が開くと、そこには顔を真っ赤にさせながらコチラを見つめている勇音の姿があった。

それを見た卯ノ花は笑みを浮かべる。

「あら、ようやく来ましたね勇音。さぁ…此方へいらっしゃい。一緒に彼を――――

──壊してあげましょう…」

勇音と卯ノ花は師弟

千弘に惚れている女性は隊士の中にも幾人かはいるとは思うが、中でも異常な程までの恋愛感情を抱いているのは以下の4名である。

1人は彼の上司である『涅ネム』もう1人は蘇った初代隊長『鹿取　抜雲斎』そして彼女と同じ初代隊長である『卯ノ花　烈』こと『卯ノ花八千流』

最後のもう1人は　彼女の弟子である『虎徹勇音』である。

上記の3人に対して勇音はあまり交流が少なく、特に彼に惹かれる様な様子は見られなかったが、それは戦いが連続して、戦闘専門である彼が現場に向かわなければならなかったからである。

では、いつ彼と交流があったのか?それは千弘の強さが副隊長には認知されていない時であった。

ーーーーーーーー

ーーーー

「本日、任務にご同行させて頂く事になりました園原千弘です。よろしくお願いします！虎徹副隊長！」

一護達が尸魂界へ進軍する数十年も前。護廷隊へと入隊したばかりの千弘は十二番隊でありながらも、突如として卯ノ花からの依頼を受け、勇音と共に任務に参加する事となったのだ。

「…へ？」

それは勿論、勇音も知らされておらず、いきなり自身よりも遥かに小柄な死神に挨拶をされた事で目を点にしていた。

「い…いやあの…唐突過ぎて飲み込めないんですけど…卯ノ花隊長は…？」

「急な用事で来れないらしく、代わりに同行を頼まれたので来ました」

「えぇぇぇ!?（だ…大丈夫かなぁ…今回の任務は特に危険な地区での植物調査なのに…）」

勇音は不安に思い、頼りにする事なく彼と共に任務へと挑んだのだった。

その後　任務は無事に達成。途中で凶暴な虚が現れ危機に面したが、千弘の手によって一瞬にして葬られ、何の傷を負うこともなく帰還する事が出来た。彼の剣術を見て勇音は唖然とすると共に今までの不安は何処へやら。完全に彼の強さを見て卯ノ花が何故彼を自身の代わりに行かせたのか理解すると共に納得したのだった。

また、その日を境に彼と話す機会が増えると共に任務を共にする事が多くなり、次々と寄せられてくる危険な任務に彼と共に赴き、彼のサポートに徹する事で治療だけでなく剣術の腕前を上げていった。

そして、いつしか勇音は千弘を自身が憧れ、心の底から尊敬する卯ノ花の姿と重ねる様に見てしまう。

それによって勇音は次第に彼への好意を抱いていったのであった。

◇◇◇◇◇◇◇

「う…卯ノ花隊長!!何やってるんですか!?」

突然と目の前の光景を目にした勇音は驚きの声をあげるものの、卯ノ花は何も気にする事なく笑みを浮かべながら答えた。

「あらあら。見たら分かるでしょう？彼の溜まった性欲を発散させてあげているのですよ？」
「うう…」
　そう言い卯ノ花の手が千弘の顔を挟み込むと胸元に押し付けた。それによって千弘の顔は彼女の胸元に埋もれ、呼吸ができない息苦しそうな声が聞こえてくる。
「苦しそうじゃないですか!?」
「勇音…これは至ってなんの変哲もない愛する人との営み…貴方も理解できる筈でしょう？」
「そ…それは…」
　卯ノ花から諭される様に言われた勇音は言葉を詰まらせてしまう。そんな彼女を見た卯ノ花は目を輝かせると更に突っ込むかの様に畳み掛けた。
「何をしているのです？貴方も此方に来て彼と交わいなさい」
「はい……ってえええええ!?」
　突然と卯ノ花から切り出された言葉に勇音は驚愕し目を大きく開くと顔を真っ赤に染め上がらせた。
「い…いやいやいや!!私は別に／／／／／」

「あらあら。私は知っているのですよ？貴方の恋路を」

「うう…」

その言葉に勇音はまたもや言葉を詰まらせてしまう。自身の千弘に対する好意が彼女には既にバレていたのだ。今まで周りに悟られない様にはしていたが、やはり卯ノ花だけは欺くことなど出来なかった。

それでも、彼女の中では男性との触れ合いは初体験であるためにまだ葛藤があった。

「私は……」

勇音は目を逸らし、否定しながらも千弘を見る。

「……」

いつもはハッチャけ、戦いとなればふざけながらも必ず撃退する頼もしい彼が今では彼女の胸元で苦しそうに蹲きながらも抵抗ができず屈服させられている。そのギャップと今まで抑え込まれていた彼への感情が彼女の胸の内で重なり合い、少しずつ膨れ上がっていった。

「勇音…私はそんな優柔不断な子に育てた覚えはありませんよ。――――

―――――――素直になりなさい」

その言葉によって、感情が遂に刺激を受けたニトログリセリンの様に爆発してしまった。

「むぐぅ!?」

すると　卯ノ花の胸元に埋まっていた彼を押し潰すかのように勇音の胸が彼の後頭部に押しつけられた。

「ごめんね…千弘くん…」

彼の後頭部に乳房を押し付けた勇音の頬は赤く染め上がっていた。

「むぐぅ…!?むごぉ…!」

彼女の卯ノ花とほぼ同じ大きさである豊満な胸と卯ノ花の胸が両側から千弘の顔を押し潰し柔らかい感触の海の中へと飲み込む中、勇音は笑みを浮かべながら荒い息を吐いていた。

ーーーーーー

ーーーーー
ーー
勇音は千弘を卯ノ花と同じく床に横にさせた千弘に覆い被さるかの様に抱きついていた。
「卯ノ花隊長…!どうですか!?」
「とても上手ですよ」
微笑みながら送られた卯ノ花の賞賛を耳にした勇音は笑みを見せると更に勢いを上げていく。それによって千弘の全身が強張ると共に彼女との密着度が高まり彼女の身体に埋もれていった。
「んぐ…!!んぐぐ…!!」
彼女の下敷きにされていた千弘は彼女との行為による刺激によって正気を取り戻したものの、彼女とも性行為を行った事で再び心の中が混乱していた。
「〜!!(だ…だめだ!!勇音副隊長までも関係なんて…!!そんなの…!!)」
卯ノ花に続き勇音とまでも関係を持つことは、千弘の精神に更なるダメージを負わせており、自責の念に苦しむと共にネムへの罪悪感でパンクしそうであった。
「〜!!勇…勇音副隊長…!!お願いします…!!もうやめ…むぐぅ!?」
もう無理であることを必死に彼女へと伝えようとするも、今の彼女には全く届いてお

らず、それどころか更に掻き立てるかの様に卯ノ花が彼女へと耳打ちする。

「辞めてはいけませんよ勇音。彼は恥ずかしがっているのです。今こそ今まで引っ張ってきた彼を私達でリードしてあげましょう♪」

「はい!!」

横から囁く卯ノ花の言葉によって勇音の腰を振る速度と力強さは更に加速してった。それどころか彼女の言葉に感化され、さらに激しくなっていく。

「んぐ…!!や…やめ…でちゃ…」

「出ますか!?いいですよ出してください!!卯ノ花隊長にしたように私にも…!!!」

勇音は秘部へと挿入された千弘の股間を更に刺激すると共に後押しするかの様に千弘の顔を胸元に押し付ける。

「うふふ。では私も手伝ってあげましょう♪」

そう言うと卯ノ花は後ろから千弘の上半身を起こすと、目の前の勇音と挟み込むかの様に彼の後頭部へと豊満な胸を押し付けた。

「んぐぅ〜!!」

「ほわぁ…!!千弘君…見えなくなっちゃいましたねぇ」

目の前から感じる彼女の柔らかな胸の感触と下半身から感じる秘部の締め付けによ

る感触。それによって全身に熱が伝わると共に下半身が刺激され、再び身体の底から快楽の衝動が押し寄せてきた。
「ほら千弘さん…」
「千弘くん…!!」

その言葉と共に2人の密着する力が更に強まった。

その瞬間

「〜!!!!（だ…ダメ…!!!!）」

溢れ出る衝動に耐えきれず勇音の中に射精してしまった。
「んぁ!!…千弘君が…私の中に…!!」
下半身から感じてくる感覚に勇音は身体を強張らせると共に快楽に身を任せたことによって瞳は上を向き、快感のあまり口元からは拭えない涎が垂れていった。
◇◇◇◇◇◇
それから疲れた勇音はよろよろと千弘から離れると、疲労に耐えられずに床に倒れる

が、それを卯ノ花が抱き止め労う様に頭を撫でた。
「ハァ…ハァ…ハァ…」
「お疲れ様です勇音。よく出来ましたね」
「はい…！」
卯ノ花から言葉をかけられた勇音は満面の笑みで頷いた。

その一方で、勇音とも性的関係を築いてしまった千弘は苦悩と罪悪感と射精による倦怠感によって床に倒れていた。
自身の不手際によってもう2人の女性と関係を築いてしまった。ネムにはどの様にして説明すればよいのか、考えようにも射精によって思考力を奪われてしまった為に何も考える事が出来なかった。
だが、彼女達の様子から、千弘はようやく終わったのか安堵の息を吐き、立ちあがろうと力を振り絞る。
「(早く…戻らないと…)」
その時であった。
「では勇音…今度は私達が彼を気持ちよくさせてあげましょうか…！」

「はい！」
「…え!?」
　彼女らのまだ元気が有り余っているかの様な溌剌とした声が聞こえると共に自身の下半身が持ち上げられ、２人に挟まれる様にして膝の上に載せられた。
「な…なんなんですか!?」
「うふふ…千弘さん…まだ終わりませんよ？貴方には御礼をしなくては…」
「千弘くん…今度は私達が気持ちよくしてあげますからね…」
　卯ノ花と勇音は妖艶な笑みを浮かべると共にその巨大な乳房を持ち上げ、千弘の射精したばかりの股間を両側からはさみこんだ。
「ひぐぅ!?」
　その瞬間　股間が暖かく柔らかな感触に襲われた。勇音と卯ノ花の乳房は両サイドから挟むよりも押し付け合う事で千弘の股間を乳肉の中へと完全に閉じ込めており、汗と熱気が充満した乳肉に閉じ込められた股間が彼女らの乳肉によって押し潰されてしまう。
「あうぁあ…!!」
　それによって再び勃ってしまった。しかも彼女達の乳肉で勃ってしまったために周

囲から押しつぶすかの様に押し寄せてくる乳肉と擦れ合うことで更に快感が押し寄せてくる。

「ふわぁ…千弘君が顔を真っ赤にしてます…!!」

「うふふ。中で再び元気になっているので分かりますよ…では勇音」

「はい!」

２人は同時に胸の中に飲み込まれた股間を押しつぶすかの様に乳房を揉みしだいた。

「ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ぁ!!!」

それによって敷き詰められた乳肉の牢獄に閉じ込められた股間が周囲の乳肉に押し潰され、次々と形を変形させていきながら快感を与えてくる。

「どうですか千弘くん…？私…ネムさんや卯ノ花隊長よりも少し小さいですけどちゃんと挟めてますか…？」

「ひぎぃ…!?お…お願いですからもぅ…やめ…」

次々と襲いかかってくる２人の巨大な乳房の感触に千弘は目元から涙を浮かべながら懇願しようとするもの、それを再び卯ノ花が遮る。

「勇音、まだ力が足りませんよ。もっと頑張りなさい」
「はい！」
　その瞬間　彼女達の乳房を押し付ける力が最大まで高まった。密閉された乳肉の牢獄は限界まで密度を高めて、股間を押し潰してしまう。
「うぁああ…!!だ…だめ…!!出る…でりゆぅ…!!」
「うふふ…情けない声を上げるその姿…とても可愛らしいですよ…ほら、私達の胸の中に貴方の欲望を吐き出してください…！」
　その言葉を掛けられた時にはもう我慢など出来なかった。
「～!!（ごめんなさい…眠さんごめんなさぁぁぁぁい!!）」

　その瞬間
　千弘は耐えきれず、ネムへの懺悔の言葉を口にすると共に溢れ出る射精衝動に身を任せながら彼女達の柔らかな胸の牢獄の中に先程よりも勢い良く射精してしまった。

　　!!　　!!
　　!!

　出口のない柔らかな胸の間で密閉された故に出された性液は胸の谷間から顔を出す事すら出来ず、そのまま中に抑え込まれてしまう。
「あ…！卯ノ花隊長…中で溢れてますよ…!!」
「えぇ…一滴残らず搾り取ってあげましょう♪」
　２人は両サイドから胸を押し付ける力を更に強めた。それによって２人の乳肉は更に内部の圧力を強め、埋もれていた股間から性液を搾り出していった。
「あ…あ…あ…」
　度重なる卯ノ花と勇音との性行為によって千弘の体力はもう限界なのか、床から離れていた頭はゆっくりと倒れる様にして後ろに逸れる。それを見た卯ノ花は、同じく息をつく勇音の頭を撫でた。
「良くできましたね勇音。では、彼の身体を洗い流してあげましょうか」
「はい！」

　　ーーーーーーーー
　　ーーーーーー

ーーー
ー

それからお風呂から上がると就寝の時間となった。卯ノ花は事前にネムに連絡を取り千弘が此方で止まる事を伝えると残りの業務を片付け、勇音と共に一つの布団の中へと身を寄せた。

「勇音…どうでしたか？初めて殿方と交わった感想は」

「うぅ…っ)…言葉ではとても…」

衣ひとつ纏わず、ただ毛布と掛け布団のみに身を預けていた卯ノ花の言葉に、正気に戻っていながらも、彼女と同じく衣服を惑わないまま横になっていた勇音は顔を赤くしながら目線を落とすが、それを見た卯ノ花は優しく微笑む。

「これからはこの子との夜伽も…日課となるのですよ。よく覚えておきなさい」

そう言い卯ノ花は自身と勇音との間に挟まり、胸元に埋もれながら眠っている千弘へと目を向ける。その目からは何も感じられず、ただ自責の念に苦しむ事なく己の不甲斐なさに絶望しているかの様なものであり、その表情を隠すかの様に彼女の胸元に顔を埋めていた。

そんな彼の様子を微笑ましく思っているのか卯ノ花は彼の頭を優しく撫でる。

「千弘さん…たまには此方にも泊まりに来てくださいね。その時は私達でまた…お相手

して差し上げますからね…」
「千弘くん…あ…愛してますよ…」
２人は互いに千弘に言葉を掛けると彼を温めるかの様に抱き合いながら静かに目を閉じたのだった。

ーーーーーーーーーーー

その光景を扉の向こう側から２人に気付かれる事なく見ていた影はメガネを掛け直し頬を赤く染めながら心臓に位置する胸を掴んでいた。
「…私も…もう我慢などしなくていいですよね…？千弘くん…」
そう言いその影は２人の間に挟まれている千弘を見つけるとゆっくりと舌で唇を舐めるのであった。

初代八番隊隊長の愛は重い

『初代護廷十三隊』

それは総隊長である元柳斎が設立した当初から所属し、最初の隊長職を担っていた猛者達である。その力は歴代最強と謳われている。

彼らには今の護廷隊の様な民や貴族を救う事も治安を守る信念もない。ただ障害物として立ちはだかった者達を容赦なく切り捨てていく生粋の殺し屋集団であった。

そんな隊長達も卯ノ花と元柳斎を残し死亡。全員の魂は尸魂界の大地に還元される事なく地獄の底へと送られ、会うことなど不可能となったのだった。

――――――だが、そんな不可能さえも〝あの死神〟によって覆され可能となってしまった。

『園原千弘』だ。

彼はユーハバッハの手によって一度は地獄に落とされたものの、それを見越していた

マユリと浦原によって帰還、それどころか事前にマユリに指示を受けていたのか地獄に囚われていた初代隊長達のうち、数人の霊子を持ち帰ってきてしまったのだ。

そして、歴代最強の護廷隊が助っ人として復活し現在の護廷隊には秘密裏にマユリの指示の元、別動体として霊王宮にてユーハバッハ達との激戦に参戦していたのだ。

その後、復帰した隊長達はどうしているのか？皆も気になるだろう。彼らは血に飢えている為に今の隊長達と対立し戦っているのか？それとも今の護廷隊の緩さに嫌気がさし再び世へと旅立ったのか？

否――――。彼らは今更隊長職に戻る気はないのか、全員とも気に入った隊へと居候し自分の趣味に充てているようだ。

その内の１人である女性死神『鹿取　抜雲斎』

初代護廷十三隊の八番隊隊長を担っていた豪傑の１人であり、その身体能力は凄まじく、素早さは勿論だが自身の身体よりも長い薙刀を自由自在に操る技術も兼ね備えており、数少ないテクニックタイプの戦闘術を持つ。

予測不可能な動きから離れる槍の一撃は全てを貫くと共に斬り飛ばす事から、１０００年前はこの槍を自由自在に操り、滅却師達を次々と斬り伏せていったらしい。

そんな初代隊長達と共通の血の気があった彼女は今では十二番隊に所属して第四席。戦いの最中もそうだが、終わってからは、ある1人の死神を狙っていたのだった。

ーーーーーーーー

ーーーーー

ーー

卯ノ花と勇音の2人に犯されて数日後。朝日が照らし出す瀞霊廷の中にある十二番隊隊舎にて――。目覚めた千弘は頭を抱えていた。

「はぁ…どうしよう…卯ノ花隊長どころか勇音副隊長とまで…」

両脇でまだネムと鹿取が寝ている中、彼女達よりも早く目覚めた千弘は心の中で苦悩し、いつネムに言うべきか、それよりもどの様にして言い訳をすべきか、悩んでいた。

すると

「んん…おはようございます千弘さん」

寝息と共に隣で眠っていたネムが目を覚まし、ゆっくりと状態を起こした。起床した彼女の目が此方に向けられると、思わず目を逸らしてしまうが、すぐに目を向け、返事を返す。

「お…おはようございます…」

「…?」

あやふやな返事であった為に彼女は少しばかり不思議そうに首を傾げていたが、すぐに彼女は笑みを浮かべながら手を広げてきた。
「千弘さん…朝のハグです」
「は…はい／／／」
広げられた胸の中に飛び込む様にして、彼女の背中に手を伸ばしその身体に抱き付いた。
「よしよし…良い子ですね」
彼女の女性特有の甘い香りと頭を撫でる優しい手つきに先程まで恐れていた悩みが少し和らぎ安らかな感覚を与えてくれる。
「千弘さん……何か悩みでもあるのですか?」
「ええ!?い…いや別にありません…」
「そうですか」
それからネムと千弘はマユリの補助、そして目覚めた鹿取は十二番隊隊士達の指南へと向かって行った。
だが、勤務中は千弘は苦悩のあまりネムとあまり顔を合わせられなかったと言う。
ーーーーーーーーーー

ーーーーー

ーー

それから時間が経過して夜。月が輝き出す頃に勤務は終わり千弘は自身の部屋へと帰還した。ネムはまだマユリの補助が残っているためなのか、遅くなる様だ。

「はぁ…どうしよう…」

自身の部屋の前まで着いた千弘はいまだに晴れない苦悩を抱えながら扉へと手をかける。

その時であった。

「ふぐぅ!?」

突然　扉が開くと共に手が自身の身体へと伸びてくると巻き付き柔らかな感触に包まれると共に部屋の中へと引き摺り込まれた。

ーーーーーーーー

「ふぐぅ…!!ん〜!!!」

「よしよし〜」

暗い部屋の中＿＿＿＿。突然と自身の顔に押し付けられた柔らかい感触は甘い香りを

発しながら離れず、息が出来なくなってしまう。更にその柔らかい物体は顔どころか上半身さえも覆ってしまいそうな程まで巨大なものであった。

「んぐ…!!んぐんぐ…」

顔を覆い尽くす物体は動かせば動かすほど顔に張り付き、まるで水に沈んでいくかの様にいくら顔を動かそうにも抜け出す事ができなかった。

すると

「ん…ぷはぁ!!!」

ようやく自身に押し付けられていた物が離れ、視界が顕となり呼吸ができる様になった。

「ハァ…ハァ…ハァ…貴方…は!?」

酸素を一気に吸い込み肺に溜まる様に大きく呼吸しながら、上を見上げると、千弘は目を大きく開く。

「ね…ねぇ…さん!?」

「お帰りなさい千弘くん。待ってましたよ」

そこには初代隊長の中でも数少ない女性隊長である鹿取の顔があった。因みに千弘は〝ある一件〟から彼女の事を姉さんと呼んでおり、対して彼女もそれが気に入っているのか千弘の事も弟の様に見ている様だ。

そんな彼女は千弘と目が合うと顔を真っ赤に染め上がらせながら頬をゆっくりと釣り上げて怪しげな笑みを浮かべた。
その顔を見た千弘は身体を震わせながら下がる。
「な…なんなんですかいきなり!?」
「え? 簡単ですよ。それは……」
千弘が尋ねると鹿取は首を傾げながらも答えると、千弘の身体を抱き締めていたもう一方の手を彼の後頭部へと添える。

その瞬間
「んぐ!?」
彼女の唇が千弘の唇へと押し付けられた。彼女の卯ノ花やネムと同じ柔らかな唇の感触が伝わってくるが、それだけではない。彼女もネム達と同様に無理矢理、舌を口内に入れて自身の舌と絡めてきた。
「…んん…!!~!!」
「…ん…ん♡」
必死に抵抗しようとするも、滴る唾液に包まれた舌が蛇の様に巻きつき彼の身体からエネルギーを吸い取っていき、唇だけでなく、抱き上げられた際に彼女の自身の頭より

も大きな豊満な胸が下半身へと押し付けられていた事で、伝わってくるその柔らかさにより全身が刺激されていく。
部屋の中にはクチュクチュクチュと生々しい音が静かな響くと共に何度も何度も舌を絡めるたびに千弘の目からは光が失われていき、目も上を向き始めていった。

それからしばらくして、
「ぷはぁ…」
彼女の唇がようやく離された。だが、離れた時には既に千弘は籠絡しており、全身を震わせながら彼女の巨大な胸に押しつけられていた股間も勃ち上がっていた。

それを見ていた鹿取は笑みを浮かべると、床に倒れた彼に覆い被さり、ゆっくりと衣服を脱がしていく。
「な…!?や…やめ…むぐぅ!?」
「動かないでくださ〜い」
それを見た千弘は咄嗟に対抗しようとするが、寸前に鹿取が再び身を乗り出し大きな胸で顔を押し潰した。
「〜!!」

巨大な胸の下敷きになり、もがき苦しむ中、彼の衣服を脱がし終えた鹿取は自身の衣服も脱ぎながら答える。
「さっきの質問の答えですが…簡単に言えば八千流さんやネムちゃんと同じですよ…♡」
ーーーーーーーーー
ーーーーーー
ーーー
ー
「ほらほら、千弘くんどうですか?アッサリと飲み込まれてますよ〜」
鹿取は押し倒した千弘の下半身を自身の膝に寝かせると、目の前にある小さな股間を巨大な胸で挟み込んでいた。ネムよりも大きな肌色の二つの果実が小さな股間を先端どころか腰を丸ごと挟み込んでおり、上下に揺れていた。
「ふふ…知ってますよ?千弘くんは…これが好きな事を」
そう言い鹿取は自身の腕で持ち上げた巨大な乳房を揉みしだき、千弘の股間を柔らかな感触で刺激していった。
「ひぐぅ!?（ね…眠さんより全然大きい…）」
その言葉と共に挟む力と勢いはさらに増していき、敷き詰められた乳肉に股間が飲み

込まれ更に柔らかな感触が伝わってきた。
「こういうのは初めてですけど…どうですか？上手く出来てますか？」
「ひぃ!?や…やめて…ください…!!これ以上は…!!」
「ふふ…出そうですか…？いいですよ…中で大きくなっている様ですが出したかったらいつでもこの胸の中に出してくださいね♡」
「ひぎぃぃ!!!」
　鹿取の胸を揉みしだく力が更に強まる。彼女の乱菊をも上回る巨大な乳房に飲み込まれた股間が、密閉された空間の中で四方八方から迫り来る乳肉の壁に押し潰され次々と変形していった。
「知ってるんですよ？貴方がネムちゃんだけでなく八千流さん達と寝た事くらい…」
「え…」
　すると、鹿取の胸を揉みしだく手が一瞬ながら止まった。彼女の言葉に千弘は驚き、目を俯く彼女の方へと向ける。
「酷いじゃないですか…」
「…？」
　その瞬間　俯いていた顔が一瞬にして上がり、彼女は顔を真っ赤にさせながら頬を膨らませていた。

「私抜きなんて酷いじゃありませんか！私は１０００年も前から君の事をずっと想ってたんですよぉ!!」
「ひぎぃぃぃ??!!」
鹿取の胸を揉みしだく強さが更に激しくなり、乳内の千弘の股間が再び乳肉の壁に埋もれ、もみくちゃにされる。
「や…やめて…わかったから…やめ…て…!!もう…で…で…」
「ふふふ…出そうですか？いいですよ…いつでも私の胸の中に出してくださいね…！」
その言葉と共に股間を挟み込む彼女の胸の圧力は限界まで達した。それによって千弘はもう我慢ができず、身体の底から湧き上がってくる快楽の衝動に身を任せてしまう。
「だめ…!!も…もう……で…でり…!!!」
その瞬間
――――――――――――――――――――
迫り来る乳房の感触に耐えきれず、千弘は彼女の乳内へと射精してしまった。
彼女の谷間の中で勢いよく出された精液は彼女の深い谷間から外へと出る事ができず、飛び出す音が中から微かに響いてくる。

「ふふ…出してしまいましたね…。胸の中から熱いのが出てくるのが分かりますよ…」
深い谷間の中で乳肉を掻き分けながら精液が溢れてくる感触が伝わると鹿取は笑みを浮かべながら、ゆっくりと、尿道に残った精液を絞り出すかの様に乳房から股間を抜いた。

「あ…あ…あ…」
彼女の目の前で倒れていた千弘は、彼女の乳房の感触と射精によって、一気に体力を持って行かれてしまった為に荒い息を吐いていた。

「ふふ…たくさん出ましたね…」
その光景を微笑みながら見ていた鹿取は胸にへばりついた精液を拭き取ると、何の感慨も浮かんでいないかの様に、更にあたりまえであるかの様に秘部へと手を掛けて、ゆっくりと千弘に跨った。
「じゃあ…次は私も…お願いしますね…」
「…え?」
その言葉に上を向いていた千弘はようやく彼女が自身の股間の上に跨っていた事に

気づいた。
それを見た瞬間に卯ノ花と勇音にさせられた時を思い出し、身体を震わせながら懇願し始めた。
「ま…まって…!!これ以上　他の女性と関係を持ったら…私は…!!」
卯ノ花と勇音の二人だけでも自身にとっては厳しいものであり酷く罪悪感が湧き心を抉られてしまう。それがもはや3人目となると、遂には罪悪感が満たされてしまいネムには話しかける事が出来なくなってしまう。
それが自身にとって最も酷なものであった。
だが、そんな気持ちを鹿取は察する気も聞く気も毛頭なかった。
「問答無用です」
「ひぐぅ!?」
千弘の言葉を聞く事なく鹿取は自身の秘部へと千弘の股間を挿入し、上下に揺れ始めた。
「これもネムちゃん達としましたね!?しっかり見ていましたよ!!」
「な…なんでそんなとこま…ひやぁ!?」
「ふふ…顔を真っ赤にしてる千弘くん可愛い♡」
ネムとの性交をも見られたことに驚くものの、それに耳を貸すことなく鹿取は次々と

千弘の股間を自身の秘部に打ち付けていった。
「あぁ…♡ 千弘君が私の中に入ってくる…」
自身の秘部から潜り込んでくる千弘の股間の感触をその身に味わいながら鹿取は頬を赤く染め上げる。
だが、千弘はそれによって顔面を真っ青にさせ始めた。
「まって…まってよ!!嫌だ…これ以上は他の女性とはいやだ!!」
望まない3人目の女性との性交。そしてそれが正に現実へとなろうとしたことによって千弘の抱く罪悪感とネムに知られた時の恐怖が膨れ上がり、涙が流れ始めてくる。
だが、それを見ても鹿取は緩める気などなかった。
「照れなくてもいいんですよ?これから…日課になるんですから…!!」
「ひぐぅ!?」
その瞬間　彼女の揺れる速度は更に高まり、股間の先端部分から感じる彼女の秘部の感触が次々と伝わってきた。それによって先程射精したばかりの股間が再び彼女の中で勃ちあがっていった。
「い…いやだ…嫌だ……!!
!!もうい……むぐぅ!?」
限界となった千弘は叫ぼうとしたが、その口がどころか顔全体に彼女の巨大な乳房が

再び押し付けられ、深い谷間の中へと密閉されてしまった。
「〜!!（だ…だ……して…!!い…いや…!!）」
抵抗し涙を流しながら懇願するものの、その顔は巨大な乳肉の中へと埋まり何も聞こえない。
「ふふ…怖がらなくてもいいんですよ？終わるまで私の胸の中でじっとしていましょうね…!!」
「〜!!!」
千弘の身体へと覆い被さり彼の身体を飲み込むかの様に全身で包んだ鹿取は何度も何度も腰を振った。
「はぁ…♡千弘君…千弘君千弘君千弘君千弘君千弘君千弘君千弘君千弘君…!!」
千弘の上へとのし掛かった彼女は胸に埋まる千弘の頭を抱き締めながら何度も何度も名前を口にしていく。その姿からは皆の前でいつも沈着冷静で的確な指示を出す面影は完全に消え去り、千弘に異常な愛を注ぐ獣となっていた。
「可愛い…可愛いですよ千弘君…!!剣を振る姿も泣いてる姿も犯されてる姿も可愛いです!!」
そう言い鹿取は何度も何度も腰を奮い、秘部に挿入された千弘の股間を刺激していっ

た。
　彼女の豊満な胸の感触と甘い香りそして次々と股間に伝わってくる彼女の秘部の感触によって千弘は再び身体の奥底から湧き上がってくる快楽の衝動に押されてしまう。
「〜!!!（だ…だめぇ…!!）」

　そして、迫り来る感触と腹の底から湧き上がる快楽の衝動にもう耐える事ができず、再び彼女の身体へと射精してしまったのだった。

「んぁああ♡千弘君……凄い気持ち良いですよ…!!!」
　その感触を受け取った鹿取は満面の笑みを浮かべ、千弘を抱き締めながら快楽に身を任せる。

「はぁ…はぁ…はぁ…千弘君…大丈夫ですか？窒息してませんか？」

　それから快楽に身を任せ、身体の奥底まで染み込ませた鹿取は自身の下敷きになっていた千弘の顔を胸の谷間から引き上げた。
「あれ？」

鹿取が胸元から引き上げた千弘の顔は――涙でぐしゃぐしゃであった。

すると

「うぅぅ…!!ふぇええん!!!!」

度重なる強引な性交によって千弘は精神に限界が来たのか子供の様に泣き出してしまった。

部屋中に千弘の泣き声が響き渡る中、千弘は俯きながら彼女へと訴えた。

「なんでこんな事するんですか!!!!私には眠さんがいるのに…!!!!これ以上浮気してしまったら最低な人になっちゃうじゃないですかぁ!!」

そう言い千弘は溜まりに溜まっていたネムへの罪悪感が溢れ出してしまい、子供の様に泣き出す。

「もうやだぁ!!話しても聞いてくれないし眠さんに知られたら絶対に変な目で見られるよぉ…!!!!」

「そんな…泣かないでください千弘君!」

彼の目元から流れ出る涙は次々と溢れ出し、布団の上へと落ちていく。それを見てい

た鹿取は驚きながら彼を慰めようとするが、千弘の泣き声は一向に止むことを見せず、鼻を啜る音が響き渡っていった。

「うぅ…ぐすぅ…眠さん…ごめんなさい…本当にごめんなさい…!!」

そんな中、その様子を見ていた鹿取は――――

「千弘くん…そんなに泣かれてしまっては…私……私…――――

―――――――――もっと興奮してしまうじゃないですか♡」

顔を真っ赤に染め上がらせると共に不気味な笑みを浮かべていた。

「へ…？」

千弘が驚いた時には鹿取の腕が脚へと伸びており、再び膝の上へと乗せられた。そして、目の前には彼女の不気味な笑みが自身へと向けられており、超巨大な乳房が股間の両サイドへと置かれていた。

「千弘くんが泣き終わるまで……何度も何度も挟んであげますからね♡」

「ひぃ!?」

その言葉を聞いた途端　千弘の全身に寒気が走り出し、必死に彼女へと懇願し始めた。

「や…やめて…!!お願いします…!!やめ――――――

だが、時はもう既に遅かった。

「ひぎぃぃぃぃぁ!!!」

彼女の巨大な乳房が再び自身の股間を包み込み圧迫した。彼女には好意はない。な

いにも関わらず身体は彼女の乳に埋もれた瞬間にネムと性交した時と同じかそれ以上に熱くなっていき、射精したばかりの股間も、彼女の乳内で勃ちあがっていった。

「千弘くん…千弘くん…　千弘くん…千弘くん…　千弘くん…千弘くん…!!」

「うぅぁぁあ…!!」

鹿取は何度も何度も彼の名前を口にしながら股間を挟み込んだ胸を揉みしだき、飲み込まれた股間を押し潰していく。それによって何もかも飲み込もうと迫ってくる彼女の乳房のその光景に恐怖を覚えると共に疲労と流れ込んでくる快楽に千弘は悲鳴の声をあげていった。

「私達はきっと結ばれる運命だったんですよ！抜雲斎と抜刀斎…すごく似てませんか？親近感を感じませんか？ねぇ？ねぇ？ねぇ!?」

「ひぐぅ！」

鹿取が何度も何度も尋ねるも千弘の脳内は既に迫り来る彼女の乳房への恐怖によって埋め尽くされていた。

「嫌だ…おっぱい嫌だ…!!潰される!!!おっぱい怖い…!!!怖いよぉおお!!!!!」

泣き叫びながらも彼女の乳房によって犯されていき、次々と籠絡していくその様子に、鹿取の心に再び業火が灯されてしまった。
「はぅぅぅ♡もう我慢できませんッ!!!ここからは私の気が晴れるまでモミクチャにしてしまいますね!!」
「い…いやだ…嫌だぁぁぁ!!!」
その後　千弘は彼女の胸に挟まれた事で何度も何度も乳内へと射精した。いくら射精しようとも胸の谷間からは出してもらえず、一度出せばすぐさま2回目へと入り、一度休憩が入るも、束の間で今度はサラシによってギチギチに詰め込まれた乳肉の谷間へと飲み込まれ再び射精させられてしまった。
「お…おねがいします…もう…やめ…て…」
「まだまだですよ…もっともっと挟んであげます…♪」
そう笑みを浮かべた彼女はサラシによってキツく締め付けられぎゅうぎゅうに押し込まれた胸の谷間へと彼の股間を無理矢理入れて圧迫した。

そして　終始満面な笑みを浮かべる彼女の乳内に射精していくうちにネムへの罪悪感を抱く事さえも出来なくなっていった。

ーーーーーー

ーーー
ー
「…ふふ。どうでしたか千弘くん…あれ？」
あれからどれほど時間がたっただろうか。乳内射精が８回目を終えた時には既に千弘の目からは光が失われており、それに続く様に倒れていた身体も動き出す様子は無かった。
「ぱ…ぱ…い…ぱい…」
見れば虚な瞳を向けながら何かをずっと連呼しており、完全に壊れてしまった事が分かる。全身から力が抜け落ち情けなく倒れる様からはいつもの規律を守る律儀な姿勢が感じられず、欲に溺れてしまった獣のようであった。
「ようやく落ち着いた様ですね」
その様子を微笑みながら見ていた鹿取は乳房で挟み込み、尿道に残っていた精液を絞り出す。そして胸にへばりついた精液を水タオルで全て拭き取り、横になると彼の顔を胸元へと抱き寄せた。
「…ぱい…ぱい…」
「えぇ。貴方の好きな〝ぱいぱい〟ですよ」

胸元に抱き締められた千弘は光の失った虚な瞳を向けると、まるで無意識であるかのように彼女の乳首を咥えた。

もう何も考えられない。ネムへの懺悔の言葉も念も何もかも抜け落ち、ただ目の前の彼女に〝甘えたい〟という欲に従っていた。

それを微笑みながら見ていた鹿取は彼を離さないかのように力強く抱き締めながら目を閉じた。

「知ってますよ…君がネムちゃんだけでなく…私や八千流さん達も好きになって困っている事も…」

そう言い鹿取は必死に乳房を吸う千弘の頭を撫でた。

「私だけじゃありません。皆も知ってますよ。だから君は安心して私達の事はずっと好きでいていいんですよ」

千弘が考えている事とは全く異なる事をネム達と共有していた鹿取は、１０００年前のあの日、千弘と出逢った頃の事を思い出した。

あの日、彼との刃を交え興奮した事は今でも忘れていない。そして、彼と地獄で再会し再び刃を交えた事も――――。

再会し、初めて会った時と同じように彼と刃を交えた時から自身の心は完全に彼に奪われていたのだ。
「千弘くん…私の事…好きですか？」
頭を撫でながら徐に尋ねると、千弘は今にも途切れそうな声で答えた。
「す…き…」
その言葉からは正気はない。
だが、それを聞けただけでもう満足であるのか、鹿取は再び身体に包み込む様にして千弘を抱き締めると彼の頭を撫でた。
「私も愛してますよ…これからは何処にいようと…ずっと側にいますからね…

――――――ずっと…永遠に…

八番隊の隊花は『極楽鳥花』花言葉は『全てを手に入れる』

この日、彼女は彼の身体のみならず心と人生を手に入れたのであった。

三つ編みと眼鏡に挟まれる

私は最低な人間だ…愛すべき女性がいるというのに……複数の女性と関係を持つなんて…

ーーーーーーー

ーーーーー

ーー

まだ日が差し込む前の明朝。薄暗い部屋の中の布団の上で生々しい音が静かに響いていた。

「ハァ…ハァ…ハァ…」

「ほらほら…千弘くん…下半身が全部お姉ちゃんのおっぱいに飲み込まれてるよ〜？」

千弘は鹿取に自身の股間を挟まれていた。

目を蕩けさせながら千弘の股間を巨大な胸で挟み込んでいた鹿取は目の前にある千弘の顔へと唇を押し付けると、その力を更に強くさせる。

それによって乳肉に閉じ込められた千弘の股間に更に乳肉が押し寄せていった。

「ひぐぅ…姉さん…で…でちゃう…!!」
「もぅ～！二人きりの時はお姉ちゃんでしょ！ちゃんと呼べない悪い子は…」
鹿取は頬を膨らませると手を離し、その豊満な胸を腕全体で懐に抱え込むかの様に抱き締めた。
「ぎゅ～!!」
「ひぎぃぃ…!!」
それによって胸の中の圧力が先程よりも更に強まり中に閉じ込められていた股間が乳肉へと埋もれていった。
「ほらほら千弘くん～このままだと柔らかいおっぱいに潰されちゃうよ～」
そう言い鹿取は微笑みながら何度も何度も腕の中に収まった乳肉を揺らす。それによって隙間なく敷き詰められた胸の谷間の牢獄が押し寄せてきた。
「だ…だめ…そんなに強く挟まれたら…!!」
心の奥底から湧き上がってくる衝動に千弘は耐えるものの、その胸の圧と感触によって耐えきれなくなってくる。
「ほら千弘くん…!!我慢しないで！」
「ひぎぃ…!!で…でりゅ…!!!」
その瞬間

押し付けられる胸の谷間から何かが弾け飛ぶ音がした。
「んあああ!!」
「あ…♡」
その音を耳にした鹿取は頬を赤く染め上げながらそのまま胸を強く抱き締めた。すると、中から液体が混ざり合うかの様な生々しい音が聞こえてくる。
「ふふ…ぎゅ～っとしててあげるから全部だしてくださいね～」
「うぅ…」
鹿取は抱き締める力を強めると、乳肉で股間を圧迫し、尿道に残った性液をゆっくりと搾り出すかのように抜き取った。
そして、胸の谷間を広げると、乳房は白い精液で染められており、股間が挟まれていた胸元は精液の橋が出来上がっていた。
「ふわぁ…♡こんなにたくさん…」
それを見て頬を高調させた鹿取は笑みを浮かべると、彼の口元へ唇を押し付けた。
「ん…」
彼女の舌が千弘の唇を押し除けていきながら口内に侵入し、垂れている舌へと絡んでいく。

そして　ゆっくりと唇を離すと千弘の目からは光が消え去り、全身も蕩けるかのように鹿取の方へと倒れていった。
「ふふ…千弘くん可愛い♡」
それを受け止めた鹿取は笑みを浮かべながら囁く。
ーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー
ーーーーーー
ーーー
ー
それから　しばらくして、目を覚ました千弘は仕事場へと向かい、いつものように書類の整理やコーヒーの差し入れなどのサポートなどを行なっていった。
だが今朝の鹿取との性交が未だに頭の中に残っており、それによってネムへの罪悪感に胸を痛ませていた。
「はぁ…（眠さんに何て言えば…これでもう3人目だよ…）」
そんな中、今朝の鹿取との別れ際に耳元で囁かれた言葉が頭の中をよぎった。
ーーーーーーーー帰ったら今日も斬り合ってくださいね。その後は…また挟んであげますから♡

「…!!」

その瞬間、朝の感触が蘇り、死覇装の下に収まっていた股間がムズムズし始めてしまう。それを見た千弘は咄嗟に押さえ込んだ。

「(うぅ…こんな時に〜!!)」

すると

「どうかしましたか？千弘さん」

「ひゃい!?」

突然とネムが顔を覗き込んできた。それを目にした千弘は顔を真っ赤にさせると、即座に目を逸らす。

「な…ななんですかぁ!?」

「いえ…顔色がよろしくなかったので…」

そう言うとネムは千弘の身体を胸元に抱き寄せた。

「むぐぅ!?ね…眠さん…!?」

「……千弘さん…あなた今…」

胸元へと押しつけられ彼女の巨大な乳房に埋められた千弘は掻き分けながら顔を上げるとそこには頬を赤く染めながら此方を見つめるネムの顔があった。

「〝勃って〟ますね…？」
「〜!!」
彼女の言葉に必死に首を振り誤魔化そうとしても、顔全体に押し付けられる彼女の柔らかな胸の感触と匂いによって、更に下半身が脈動する。
「もしも我慢できないのでしたら…〝挟んで〟あげましょうか…？」
「け…結構です!!」
その言葉に千弘は必死に理性を取り戻すと、すぐさまその抱擁から脱出し逃げ出していった。
ーーーーーーー
ーーーー
ーー
それから仕事を終えた千弘はため息をつきながら回廊を歩いていた。
「はぁ…どうすれば…眠さんに嫌われたくないなぁ…」
買い物袋を片手に千弘は今日の自身の様子を振り返りながら心の中でネムに嫌われてしまうことを危惧していた。
そんなこんなで、自室へと到着すると襖を開けた。
「ただいま…」

その瞬間

―――――――中から４本の手が伸びてきて、千弘の両手両足をそれぞれ掴んだ。
「え…え…!?何ですかこれ!?」
千弘は驚くと、手が伸びてきた方向へと目を向ける。そこには頬を赤く染め上がらせた鹿取とネムの姿があった。
「な…なななに何をしてるんですか二人とも!?」
「ふふ…丁度良かったですね…」
「えぇネムちゃん」
「え!?な…!?た…たすけ…」
その瞬間　二人の手が千弘を引き摺り込み、扉が音を立てて閉まった。
ーーーーーーーーー
ーーーーーー
ーーー
ー
引き摺り込まれた千弘は鹿取とネムの２人に一瞬にして衣服を脱がされ、柔らかな身

体に飲み込まれていた。
「千弘さん…気持ち良いですか…？私の胸は」
暗い暗い部屋の中、艶やかな瞳と声を出しながらネムは千弘の下半身を膝へと乗せ、巨大な胸の目の前まで迫ってきた彼の股間を巨大な胸で挟み込んでいた。
千弘の顔よりも大きなその胸は根元まで飲み込んだ千弘の股間を圧迫しながら柔らかく変形していく。

その一方で鹿取は膝の上に乗せた千弘の頭をネムを超える程の超爆乳で押し潰していた。
「ほらほら千弘くん。ネムちゃんのおっぱいに挟まれてる間は私のおっぱい飲みましょうね～飲まないと体重かけて圧迫するよ～？」
「…んぐ…!!」
鹿取は身体を揺らしながら乳房を千弘の顔へと押し付ける。乳房の下からは彼の苦しみを訴える声が聞こえてくるものの、それを耳にした鹿取は更に身体を屈ませ、圧迫していった。
それによってネムの乳房に挟まれていた股間が脈動し、彼女の胸の中で更に勃ち上がっていき、乳肉の中へと埋もれていく。

その感触を感じ取っていたのか、千弘の股間を挟み込んでいたネムは頬を染め上げた。
「ふふ…千弘さんの股間が大きくなってくるのが分かります…もっと強く挟んであげますからね…」
「ひぐぅ!?」
ネムは挟み込む腕の力を更に強くさせた。それによって千弘の今朝出したばかりの股間が更に脈動し、身体の奥底から再び射精の衝動が湧き上がっていく。
「むぐぅ…やめ…潰れ……」
「千弘さん…私の胸の中で苦しそうに溺れてますね…いいんですよ…出したかったらいつでもこの中に出してください…」
「…!!!」
必死に答えようにも押さえつける鹿取の胸がそれを許さなかった。挟み込む乳房の感触と押さえつける乳房の匂いと感触によって千弘の股間は限界に近づいていた。
「で…でり…!!!」
「遠慮しないでください。貴方の熱い想い…私の胸元にたくさん出してくださいね…」
「ひ…ひぐ…!!!」

その瞬間

千弘は我慢する事ができず彼女の胸の谷間に射精してしまった。
「ひぐぅぅぅぅ!!!」
「あ…♡」
胸の谷間の中から聞こえるその音を耳にしたネムは頬を紅潮させると自身の胸と混ざり合わせるかのように乳房を揉みしだき、挟まった股間を押し潰す。
「随分と出されてしまれましたね…」
そしてゆっくりと絞り出すように乳房から股間を引き抜いた。
そこには胸の谷間を真っ白に染め上げるほどにまで出された性液がこびりついていた。
「ふふ…こんなに溜まっていたんですね…すっきりしましたか…?」
「ハァ…ハァ…ハァ…」
胸元を触り手元についた精液を弄びながらネムは笑みを浮かべると鹿取の胸の下で荒い息を吐く千弘を見つめた。
「どうでしたか~?ネムちゃんのおっぱいに挟まれながらお姉ちゃんのおっぱいに押し

潰されるのは」
「う…うぅ…」
　ネムの胸の中で射精した事でようやく千弘は鹿取の胸から解放され、今まで出来なかった呼吸を必死に行っていた。ネムの胸の中の感触や、その感触の中での射精の快感にも襲われた事で呼吸だけでなく倦怠感にも襲われており、身体を動かす事が出来なかった。

　だが、それだけでは終わらなかった。
「ほらほら、休んでる暇なんかないよ♪」
「え…!?」
　明るい声と共に鹿取のメガネの下から見える艶やかな瞳が光り出すと、ネムと交代するかのように千弘の下半身を持ち上げて胸元まで寄せた。しかも、彼女の服装が先程とは違う。
「な…何ですかその格好!?」
　見ると鹿取は現代のキャリアウーマンが着るような白いシャツ一枚を纏っていた。だが、それ一枚のみであり、下からは彼女の裸体が顔を覗かせていた。そのシャツは彼女のピンク色の乳首を隠していたが、乳首以外の彼女の巨大な胸を押さえ込めず、ボタ

ンで止めるシャツの間からは今にも乳肉が溢れそうであった。
「ふふ…どうですかこれ？現世のＯＬという人が着るスーツというものですよ。ほら見て…千弘くんの大好きなおっぱいがギュウギュウに引き締まってますよ～ここに…こうやって…!!」
そう言い鹿取はネムよりも強い力で胸で股間を挟み込んだ。
「ひぐぅ!?」
サイズの合わないシャツによって、その巨大な乳房はぎゅうぎゅうに敷き詰められ柔らかな表面が見える一方でその谷間は隙間が無いに等しく、挿入してきた千弘の股間に乳肉全体が押し潰すように迫っていった。
それによって乳肉で満たされる密室の中で千弘の股間が掻き分けるように大きくなっていく。
「今日で２回目なのにこんなに硬くなってるなんて…千弘くんは本当におっぱいが大好きなんですね…」
それを見た鹿取は頬を赤く染め上げると、乳房で溢れそうなパツパツのシャツに手を添えた。
「　　ならもっと…好きにさせてあげないと…♡」
その言葉と共に鹿取は口元から谷間へと唾液を垂らすと、股間を押し潰していた乳肉

を両手で抱き締めた。
「ぎゅ～!!」
「ひぎぃぃ…!!」
「ほら千弘くん！もっとむぎゅむぎゅできる様にお姉ちゃんの唾液も混ぜてあげたよ！どう？気持ちいい…!?」
「うぅ…!!柔らかいけど…潰れ…むぐぅ!?」
　千弘が声を上げようとした時であった。彼の口をネムの乳房が塞ぐ。
「私の時はそれほどまで叫び声を上げなかったようですが…私よりも鹿取さんの胸が気持ち良いのですか？少し嫉妬してしまいます」
「ち…ちが…」
「言い訳はいりません。このまま圧迫して差し上げます」
「むぐぅ!?」
　ネムは更に力を込めながら千弘の顔へと胸を押しつけた。それによって彼の弁明をしようとした口が顔もろとも胸の下敷きとなり苦しそうな声が聞こえてくる。
「ほわぁ～!!感じますよ！私のおっぱいの中で大きくなってくるのが!!このままも～っと激しくしますからね～!!」
「んぐぅぅ…!!!」

鹿取は更に激しく乳房を抱き締め揉みしだく。それによって乳内に飲み込まれた千弘の股間は限界へと達していった。

ネムの胸に埋もれながらも千弘の絶頂を迎えそうな声が聞こえてくる。

「出そうですか…!?いいですよ！我慢せずにたくさん…!!!」

「む…むぎぃぃ…!!!」

その瞬間

ぎゅうぎゅうに詰め込まれた胸の谷間から先程よりも激しい射精音がした。

「んぁあああああ!!!!」

「ふわあああ♡」

隙間のない乳内への射精。それによって千弘は叫び声を上げると共に先程まで動かしていた身体の動きが止まった。

乳内に射精され、その生暖かい感触を感じていた鹿取は笑みを浮かべながら千弘の股間をゆっくりと引き抜くと、その胸の谷間は先ほどよりも濃い精液で満たされていた。

「千弘くん…私の中で溺れちゃったね…」
そう言い鹿取は倒れている千弘へと目を向けた。二人の胸の谷間で連続で射精した事で千弘の体力は限界に近づいているのか、目の焦点があわず、口元から力が抜け落ちたかの様に舌が垂れていた。

「まぁ…まだ元気な様ですね…♪」
〝彼自身〟はまだ元気であった。射精したばかりであるにも関わらず、その股間は小さくも逞しく勃っており、今もなお精力が有り余っていた。
それを見た鹿取は胸を持ち上げながらネムへと目を向けた。

「ねぇネムちゃん…今度は――――――――2人でやってあげようか♪」

「はい…2人で千弘さんを…」
鹿取の言葉に笑みを浮かべながら答えたネムはゆっくりと千弘へ目を向けた。

「な…なんれすか…!?わ!?」

突然と目を向けられた千弘が戸惑うものの、それを無視して２人は千弘の腰を持ち上げ、自身の膝の間に乗せた。
そして　胸元まで近づいてきた股間に向けて、自身の巨大な乳房を持ち上げた。
「な…何をする気ですか!?」
「ふふ…決まっているじゃないですか…」
「もっともっと…千弘くんを私達で染め上げるため――
――――――です♡」
その言葉の直後　２人の巨大な胸が股間へと押し寄せた。
「ひぐぅぅぅ…!!」
挟まれた瞬間　左右からは押し寄せる巨大な胸の感触で包み込まれ、先ほど射精したばかりの股間が乳内で再び脈動し始めて行った。
「むり…!!これ以上は…!!ひぐぃ!?」
片方でさえも千弘の股間が完全に埋まるために、いくら動いても谷間から脱出することは叶わず、それどころか股間を押し潰すかのように押し付けられてくる巨大な胸の感触が精密に伝わり、乳肉の中で溺れている股間が更に刺激された。

「無理！もうむ…!!ひぐぅ!?」
　そんな中　千弘はもう耐えきれず、身体を動かして脱出しようとしたが、それと同時に２人の挟む力が更に強くなった。
「逃げちゃだめだよ！もぅ…お姉ちゃん悲しくなってきちゃったな～!!」
「罰として１０回出すまで絶対に離しませんからね…」
　そう言い２人は挟み込む力のみならず、更に強く揺れ始めた。それによって２人の乳房に挟み込まれた千弘の股間が更に硬くなっていき、身体の奥底から射精したいという衝動が再び沸き起こってきてしまった。
「ひぎぃ…!!で…でちゃ…でちゃうよ…!!」
「いいよ千弘くん！出して！お姉ちゃん達のおっぱいの中で出してよ！」
「千弘さん…私達の胸の中でたくさん出してください…可愛いあなたの愛を…私達の隙間のない谷間の中に…♡」
　千弘の言葉に２人は頬を染め上げると更にヒートアップし胸を押しつけた。
　もう隙間も何もない押し付けあう巨大な乳肉の牢獄の中で圧迫されていた股間は更に大きくなっていく。

そして

「ひにゃあああああああ!!!!!」

――――――再び千弘は2人の乳内に溺れながら射精してしまった。先程よりも量も勢いも桁違いなその射精は凄まじい音を鳴り響かせる。

だが、それでも2人の分厚い乳肉から出る事は叶わず、弱々しく乳内の中で収まってしまった。

その熱い感触を感じ取ったネムと鹿取は頬を染めると倒れた千弘へと目を向ける。

「あ…あ…あ…」

一方で射精した千弘はもう限界であり、目を回しながら舌を垂らしていた。

その時であった。

「まだ終わりませんよ」

「ひぐ!?」

ネムの声と共に再び股間が胸の感触に包まれる。見ればネムと鹿取の頬が先程よりも赤く染め上がっていた。

「残り9回もあるので…休んでいる暇などありませんよ…」
「もっとキツく…挟んであげるからね…♡」
「やめて…もうやめてよ…!!」
その後　千弘の声は2人には届かず、千弘は再び彼女らの胸の谷間に飲み込まれ9回も射精してしまった。
ーーーーーーーーー
ーーーーー
ーーー
ー
その後　精液を拭き取った二人は衣服を纏うことなく一つの布団に入り込むと千弘を挟み込むように横になった。
「今日はたくさん出せましたね…」
そう言いネムは自身の胸元に顔を押し付ける千弘の頬を撫でた。すると千弘はモゾモゾと動きながら更に彼女の胸元へと顔を寄せるとその乳首を加えた。
「あ…千弘さん…」
「必死に乳房を吸う姿……赤ちゃんみたい…」
自身と同じく彼を後ろから抱き締め、自身の乳房を吸わせていた鹿取もその仕草に母

性をくすぐられているのか頬を赤く染めていた。
「おっぱい美味しいですか？」
「お…おいひぃ…」
鹿取に答えながら千弘は甘える赤ん坊のように更にネムの胸元に顔を押し付けていった。
「今夜は冷えますから、私達の身体で温めてあげますね…」
必死に乳房を吸うその姿に頬を染めたネムと鹿取は抱き締める力を更に強くさせ、ゆっくりと彼を包み込んでいく。
ゆっくりゆっくりと。
そしてその姿はもう二人の身体に埋もれ見えなくなってしまった。頭の頭頂部のみが胸の谷間から顔を出しているものの、それ以外はどこにも見当たらない。
「千弘くん見えなくなっちゃったね…♡」
密閉された空間の中から千弘の息苦しさを訴える声が聞こえてくるものの二人は離れる気など一切ない。
「ネムちゃん暖かいですか～？」
「はい…とてもポカポカして気持ちいいです…それに…千弘さんが中でモゾモゾとして可愛いです…」

そう言いネムは頬を赤く染めながら胸元で必死に顔を出そうとする千弘を更に力強く抱き締めた。

すると

「あ、また勃ってきましたね」

ネムの胸の感触や股間を挟む股の感触に耐え切れず再び股間が大きくなり始めてしまう。

だが、もう千弘は己の自制心が制御できず、ただ先程の快感に溺れる様に彼女達の胸元へと顔を擦り寄せた。

「挟んで欲しい…です…二人のおっぱいで…」

「「…!!」」

その言葉を耳にした鹿取とネムは満面の笑みを浮かべた。

「ほわぁ～!!やっと千弘くんから言ってくれた♡」

「ふふ…治るまでたくさん挟んであげますからね…私達の可愛い千弘さん」

その後、再び起き上がったネムと鹿取は二人で千弘を胸の谷間に挟み犯すのであった。

「あ～!また出しちゃいましたね!」

「まだまだ残っているようです…もっとキツく挟んで出なくなるまで搾り取ってあげましょう…」

もう後戻りはできない。彼女らに搾られた千弘は彼女らと永遠の愛を誓うかの様に再び彼女達の身体に埋もれていくのであった。